

唐代における蕭氏と佛教

大内文雄

中国南朝の齊・梁朝を建設した蕭氏の中でも、殊に梁の初代武帝の一族は、その後、隋・唐初にかけて繁栄し、著名の人物を輩出していることで知られる。仏教的事蹟に関しても武帝一族は古来有名であり、それは隋・唐初に至っても衰えることがなかった。隋・唐初における蕭氏の中で最も仏教に関りの深かった著名人には蕭瑀があり、また彼の兄の琮や璟がいる。これ等瑀を代表とする蕭氏の、仏教への関りの具体例については、早く矢吹慶輝『三階教之研究』、塚本善隆「房山雲居寺と石刻大藏經」（塚本善隆著作集第五卷所収）に注意されていたが、今年になって愛宕元氏により「隋末唐初における蘭陵蕭氏の仏教受容―蕭瑀を中心にして―」（『中国中世の宗教と文化』所収）が発表され、隋・唐初の蕭氏と仏教との関りについては、ほぼ主だった資料を使われて究明されることとなった。しかし氏の論文はその表題に言うように、蕭瑀を中心とした唐初までをその研究対象としているものである。太宗の貞観二十二年（六四八）に蕭瑀が歿すると、蕭氏に関する仏教的事蹟は主要資料から急速に姿を消して行く。本稿はその僅かな資料の中から、蕭瑀以後の蘭陵蕭氏の仏教受容の様相について、聊かの論述を試みようとするものである。

最初に蕭瑀以前の蕭氏及び瑀の一族の仏教受容の様相について概略を紹介しておく。

新唐書宰相世系表の蕭氏の項（卷七十一下）を見ると、蕭氏世

系にはいわゆる皇舅房と齊梁房の両系がある旨、記されている。そして齊梁房は梁の武帝衍の長兄懿から派生する系統と、武帝の長子統から派生する系統とに分かれる。先に紹介した三氏の研究が対象とするのは後者、すなわち梁の昭明太子統の第三子瑒及びその子歸が帝位に即いた後梁國の流れを汲む一族であり、これが蕭氏の中で最も栄えた。後梁國とは六朝末期に西魏・北周によって江州一帯の領有を認められ、北の宇文氏政権が南の陳に対抗すべく樹立せしめた傀儡國家であり、初代宣帝瑒・次代明帝歸及びその長子琮の僅か三代三十余年の命脈を保ったに過ぎない。そうした後梁國であったが、琮を初めとする蕭氏一族は、その後、隋一代にあって厚遇を受け、南朝貴族の代表的存在として繁栄を続けた。琮の娘は隋の晋王広に嫁し、後、蕭皇后となったように、蕭氏は隋の外戚でもあったのである。こうした一般社会における勢威を背景にして、蕭琮兄弟は父祖以来の仏教信仰を極めて熱心に実行し、それは琮の弟瑀に至って唐初期にまで及んだ。瑀は唐の武徳・貞観の間において、唐朝創業の功臣という名誉を受けながら、法華經・金剛般若經の説誦講説に精勵し、それ等に関する著書をもした他、寺院を建立し、広く仏僧と交遊し、名僧を招致するなど、その行動は広範囲に亘り、且つ活発であった。そして一族からの出家者も相次いだ。これ等のことは先の愛宕氏の論文に詳細に述べられているので、今は唐・道宣が統高僧伝卷二十八・慧銓伝（慧銓は瑀の兄珣の子）に伝える彼の評語を紹介するに止める。

以家世信奉偏弘法華、同族尊卑咸所成誦、故蕭氏法華皂素稱富、……或集親屬僧尼、數將二十、給惠以時、四時無怠、故封祿所及、惟存通濟、……蕭氏一門、可為天下模楷矣、

蕭氏一族の出家者として現在文献上に確認できる者には、右の慧銓の他、蕭璟の子に智証及び尼、瑀になるとその娘三名がそれぞれ法楽・法願・法燈の名で出家し、孫娘にも惠源が出家生活を送るようになったのも右のような父または祖父である瑀を中心とする一族の、仏教信仰に根差す生活環境があったからであろうと思われる。ところで瑀の一門からの出家者の中で最も後まで生存したの、その孫娘である惠源（開元二十五年―七三七―歿）であるが、この頃の蕭氏出身者として今一人、開元十七年（七二九）に歿した少林寺靈運という僧がいる（崔琪撰 少林寺靈運禪師塔銘 全唐文卷三〇三）。しかし出身が梁の武帝の系統であることを知るのみで、それ以上の事は不明である。そして蕭氏出身の出家者は、この開元時代を境にして文献の上からは途絶えてしまうようである。ただ宋高僧伝卷十一によれば、惠源の歿後九十余年を経た玄宗の太和三年（八二九）に歿した靈象という僧がおり、彼もまた蕭氏、しかも後梁の末裔である旨が記録されている。この靈象については最後に今一度述べる機会を設けたい。蕭氏一門の出家者としては以上の様である。次に蕭瑀の歿した貞観以降において、蕭氏と仏教との関りがどのような形で現われているかを見てみたい。貞観以前にも宰相世系表に記載されていない蕭頭なる人物が、武徳八年（六二五）に寺院の増築等の護法事業を行っている例がある（海州大雲寺禪院碑―文苑英華卷八五八）。しかし貞観以降になると、例えば益州徳陽県令の蕭道弘（―彼も宰相世系表に見えない）が顕慶年間（六五六―六六一）に聖僧の壁画を作ったとある（益州徳陽県善寂寺碑―文苑英華卷八五一）他、蕭瑀の娘の法願が龍朔三年（六六三）に濟度寺の別院で歿すると、

姉の法楽尼や弟達がその死を痛み悲しんだとある位で、資料的制約はあるものの、記録は散発的となる感を否めない。先にも述べたように、惠源が死ぬ開元二十五年までには彼女等の住寺である濟度寺は一族の者達によって保護経営されていたと思われる、これが蕭瑀一族の奉仏の記録の最後であろう。

ところで宰相世系表を見ると、後梁の流れを受けた蕭氏一族は、唐一代を通じて七名の宰相を輩出しているが、唐初の瑀を除く他の六名は、皆、瑀の兄珣の家系から出ており、これが最も長く繁栄している（他に、韓休撰梁宣帝明帝二陵碑 文苑英華卷八七六参照）。より秘密に言えは珣の曾孫嵩の一族である。次に、これ等の人々が仏教にどのような関りを持っていたかを述べてみよう。蕭嵩は玄宗朝に宰相となった人物であるが、旧唐書卷九十九の彼の伝を見ると、

嵩性好服餌、及罷相、於林園植菓、合鍊自適、……嵩瞻然就養十余年、家財豐贍、衣冠榮之、天宝八年薨、年八十余、とあるように、その性癖は祖父の鈞や曾祖父の珣が篤信家であったのとは甚だ趣きを異にしている。また嵩の孫で僖宗朝に宰相となった蕭做や、曾孫で穆宗朝に宰相となった蕭僔に至ると、奉仏と言った傾向は益々見られなくなって行く。蕭做は懿宗が朝政を怠り奉仏にふける有様を諫めて、

昔年韓愈已得罪於憲宗、今日微臣固甘心於退微、とまで言っている（旧唐書卷一七二）。また彼の甥にあたる蕭僔になると、唐撫言卷八によれば、左僕射の位にありながら道士になりたいたい旨を表請している。太宗の時、蕭瑀が高位にありながら出家せんことを求めたことと好一對をなしていると言っており、もとよりこのような彼等も個人的には僧と往来したり（蕭嵩）、

訳場に参列したり（蕭俛）ということはあるものの、その仏教との関りという点から見れば、やはり蕭瑀等の世代とは隔世している感を感じ得ない。その関りのあり方はより小規模により個人的になって行ったと言つてよいであろう。また蕭俛に見られる言動には、彼が進士出身者として官界に立身して行ったと言う背景があることを見落してはならないと思われる。勿論蔭を以て起家した者も蕭氏には多数いた。しかし蕭俛・蕭俛等のように進士となつて宰相の位にまで昇りつめる人物が中唐以降において現われて来ることは注目してよいことである。南朝以来の門閥貴族としての勢威を背景にする蕭瑀等と、門閥の伝統を負いながらも進士出身の官僚としての立場を貫く蕭俛等とは、その仏教受容のあり方に大きな差違が生じたであろうし、蕭俛・蕭俛が生きた中唐以後の社会では、もはや蕭瑀等のように一族挙つての奉仏は到底望むべくもなかったと考えられよう。最後に、繁栄を続け得た後梁系の人々と較べ、恵まれない環境の中で、それでも連綿と蕭氏の名を誇りに思つて生き続けた一族と、一庶民にまで落ちざるを得なかった一族とを紹介しておきたいと思う。

前者は中唐に文人として名を馳せた蕭穎士、後者は先にも述べた靈家の一族である。蕭穎士の「贈韋司業書」に次のように伝える。

僕南遷士族、有梁支孫、系祖司徒都陽忠烈王、……於義寧武之間、同堂兄弟百有數十、自梁涉唐、多著名迹終古、著盛莫之与比、貞觀之後、羣從彫零、垂拱以來、無復大位、越敬王之凶匡復也、王父突預其謀、擯身江海、不臣武氏、旧業邵岐、一朝瓦解、（文苑英華卷六七八・全唐文卷三二三）

また宋高僧傳卷十一・靈彖伝には次のように伝える。

又判州永泰寺積靈彖、姓蕭氏、蘭陵人也、其胄裔則後梁、為周所滅、支屬星分、彖父居長沙為編戶矣、

蕭穎士は新唐書卷二〇二・文芸伝の彼の伝によれば、顔真卿と交遊があり、穎士の子の存は湖州刺史であつた真卿の下で陸羽と共に韻海鏡原の編纂を行つてゐる（大曆七十二年、七七二―七七七の頃）など、顔氏と密接な關係にあつたが、蕭氏と顔氏との關係は、これ以前に真卿の父惟貞が蕭思亮の墓誌銘を撰すなどのことがあり、一時の交際ではなかつた。ところで蕭存は、その墓誌銘によれば廬山紫霄峯の麓に草堂を持ち、「晚節に無生を学び、禪悅の味りを得」と記されるように、仏教的雰囲気有していた人物であつたようである（符載撰 尚書比部郎中蕭府君墓誌銘 全唐文卷六九一）。また同じ廬山の東林寺の經藏整備のため、亡妻蕭氏の遺した服飾費によつて判州に土地を購入し、その租入を以て布施としたと伝えられる韋丹なる人物がいる（李肇撰 東林寺經藏碑銘并序 全唐文卷七二一、藤田純子「永州における韋氏について」鷹陵史学第八号 参照）。蕭存の歿年は貞元十五年（七九九）、韋丹が江西觀察使として洪州に赴任してゐたのは元和二年（八〇七）から歿年の元和五年までである。また鑿真に受戒し、東林寺に居住したこともある曇珙という僧が、振山樓霞寺に止住し、大曆十四年（七七九）以前に州牧蘭陵の蕭公に命ぜられて僧正となつたという記録も見える（劉軻撰 樓霞寺故大德珙律師碑 全唐文卷七四二）。これ等から、八世紀後半頃には廬山等の江南の地に、蕭氏・顔氏・韋氏（蕭穎士の族弟に韋建・韋収がいる）の相互間に密接な關係があつたことが窺われる。今後の課題としたいと思う。